

# 西原大塚遺跡第111地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

埼玉県志木市遺跡調査会



## はじめに

志木市遺跡調査会  
会長 細田 信良

志木市は都心から25km圏内に位置し、住宅建設を始めとする各種開発行為が非常に多い地域になっています。

また、市域を流れる柳瀬川・新河岸川に面した台地縁辺上には、埋蔵文化財包蔵地が少なからず存在しておりますので、これを保護することが文化財保護行政の急務となっています。

包蔵地の一つである西原大塚遺跡は市域最大規模の遺跡ですが、現在、平成18年度の完成を目指して土地区画整理事業が行われております。

今回の発掘調査は、志木市消防団車庫建設に伴うもので、本施設が地域の防災対策にはなくてはならないものであり、計画の変更が不可能であるため記録保存を目的として実施したものです。

発掘調査から調査報告書作成までには、市教育委員会、市防災交通課から多くのご援助を頂き、ここに深く感謝する次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、地域の歴史の解明のために活用していただければ幸いに存じます。



## 例 言

- 1 本書は、埼玉県志木市幸町三丁目に所在する西原大塚遺跡（県No.09-007）第111地点の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、志木市教育委員会の斡旋により、志木市から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
- 3 発掘作業は平成17年1月17日から1月21日まで、整理作業は1月24日から2月28日まで行った。
- 4 調査地点の地番及び面積は、以下のとおりである。  
地番 埼玉県志木市幸町三丁目64街区10画地  
面積 138.5㎡
- 5 発掘調査の担当は、佐々木保俊があたった。
- 6 本書の作成は志木市遺跡調査会が行い、編集は佐々木保俊があたった。執筆は下記のとおりである。
  - I 佐々木保俊
  - II 遺構 内野美津江 遺物 宮川幸佳
  - III 佐々木保俊
- 7 本書の挿図版の作成は、調査参加者全員で行った。
- 8 出土した遺物および記録類は、志木市教育委員会で保管している。
- 9 調査組織
  - 〈役員〉 会長 細田 信良（志木市教育委員会教育長）  
副会長 杉山 勇（志木市教育委員会教育政策部長）  
理事 神山 健吉（志木市文化財保護委員会委員長）  
井上 國夫（志木市文化財保護委員会副委員長）  
高橋 長次（志木市文化財保護委員）  
高橋 豊（ ” ）  
内田 正子（ ” ）  
理事兼事務局長  
大熊 章只（志木市教育委員会生涯学習課長）  
監事 並木 貴子（生涯学習課主任）  
樺島 秀俊（生涯学習課主任）
  - 〈事務局〉 金子 雅佳（生涯学習課主幹）  
佐々木保俊（生涯学習課主査）  
今野 美香（生涯学習課主査）  
尾形 則敏（生涯学習課主任）  
倉部 恵子（生涯学習課主任）
- 10 発掘調査および整理作業参加者
  - 調査員  
内野美津江・深井 恵子
  - 発掘調査および整理作業協力員

朝香 輝郎・岸田 純一・土屋 富子・永井 真理・成田しのぶ・二階堂美知子・宮川 幸佳  
矢野 恵子

- 11 発掘調査および出土品整理作業・発掘調査報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館  
埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
志木市教育委員会・志木市文化財保護委員会・志木市立郷土資料館  
志木市西原特定土地区画整理組合

会田 明・浅野 信英・浅野 晴樹・荒井 幹夫・飯田 充晴・市毛 勲・稲村 繁  
井上 尚明・今井 堯・上田 寛・上村 安生・碓井 三子・梅沢太久夫・江原 順  
大谷 徹・岡本 東三・織笠 明子・書上 元博・柿沼 幹夫・加藤 秀之・金子 直行  
川崎 志乃・隈本 健介・栗島 義明・栗原 和彦・栗原 文蔵・小出 輝雄・肥沼 正和  
小久保 徹・小宮 恒雄・齋藤 欣延・笹森 健一・佐藤 康二・塩野 博・斯波 治  
白石 浩之・実川 順一・鈴木 一郎・鈴木加津子・鈴木 敏弘・鈴木 正博・田代 隆  
田中 英司・坪田 幹男・照林 敏郎・中島岐視生・中島 宏・中村 倉司・中山 清隆  
並木 隆・根元 靖・野沢 均・早川 泉・早坂 廣人・原 雅信・廣田吉三郎  
福田 聖・堀 善之・松本 富雄・松本 完・三田 光明・矢口 孝悦・柳井 彰宏  
柳田 敏司・若井千佳子・和田 晋治・渡辺 誠

## 凡 例

- 1 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。
  - 遺構の略記号は、以下のとおりである。  
Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡
  - 遺構・遺物の挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
  - 遺物写真図版の縮尺は、任意とした。
  - 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み中の数値は床面若しくは確認面からの深さを、凸堤上の数値は床面からの高さを示し、単位はcmである。
  - 遺構挿図版中の遺物出土位置の番号は、遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
- 2 本書の住居跡の記述の中で使用した主軸とは、炉跡と入口（推定）を結んだ線をいう。
- 3 遺構の土層説明や土器の記述の中で用いた色彩の表示方法は『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修によった。

# 目 次

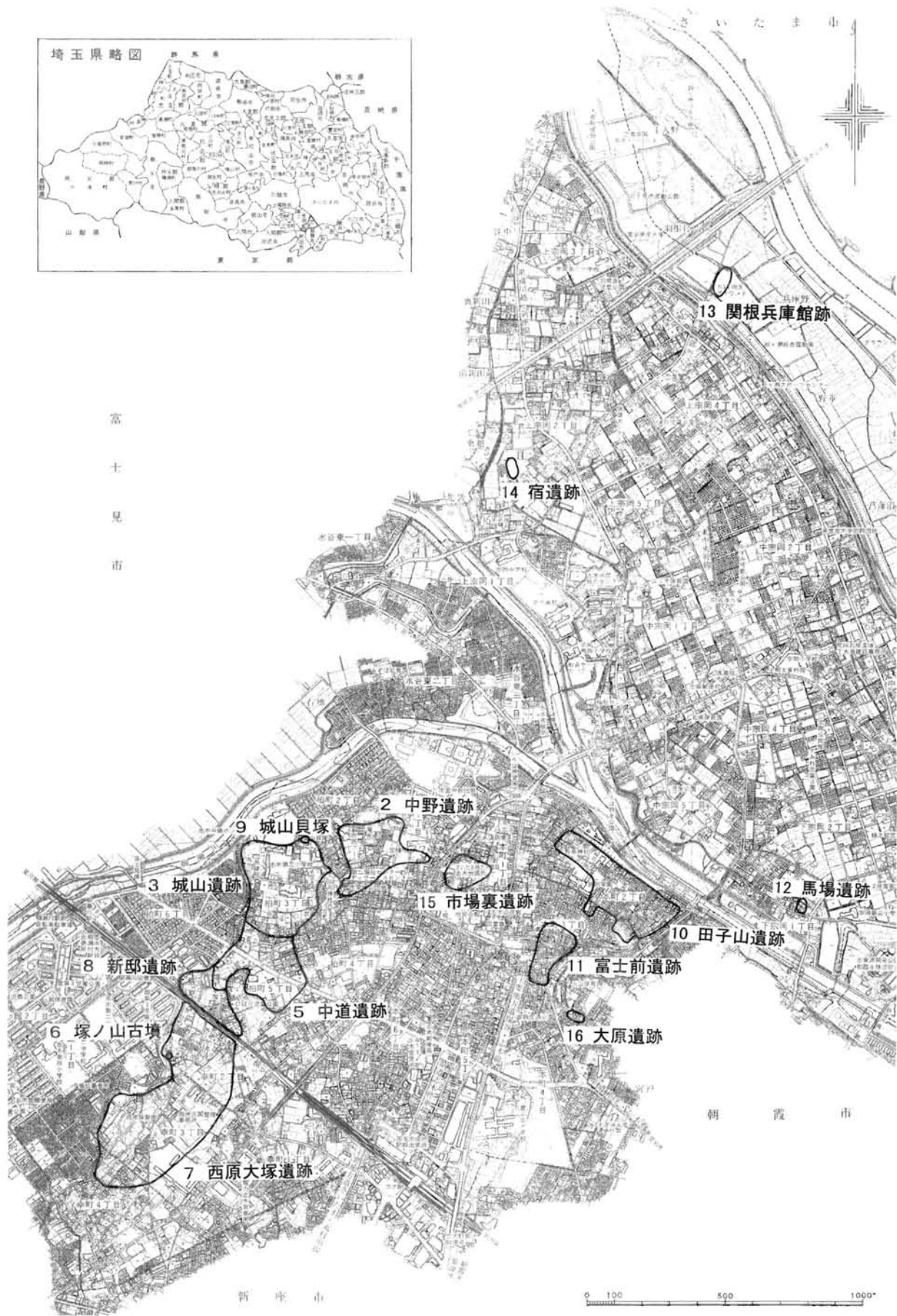
はじめに	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
図版目次	
I 発掘調査の概要	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 遺跡の位置と環境	2
(3) 発掘調査の経過	3
II 検出された遺構と遺物	3
III 概 括	8
引用・参考文献	9
報告書抄録	10

## 挿 図 目 次

第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	
第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)	1
第3図 遺構分布図 (1/300)	3
第4図 514号住居跡 (1/60)	4
第5図 514号住居跡出土遺物1 (1/4)	5
第6図 514号住居跡出土遺物2 (1/3)	7

## 図 版 目 次

図版1 調査区近景、発掘調査風景、遺物出土状態、514号住居跡、出土遺物	
--------------------------------------	--



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)



# I 発掘調査の概要

## (1) 調査に至る経過

平成15年7月、志木市教育委員会（以下、教育委員会）に志木市まちづくり・環境推進部防災交通課（以下、防災交通課）から、教育委員会が計画している「仮称 生涯学習センター」用地内に、消防団車庫を建設することの是非について合議があった。

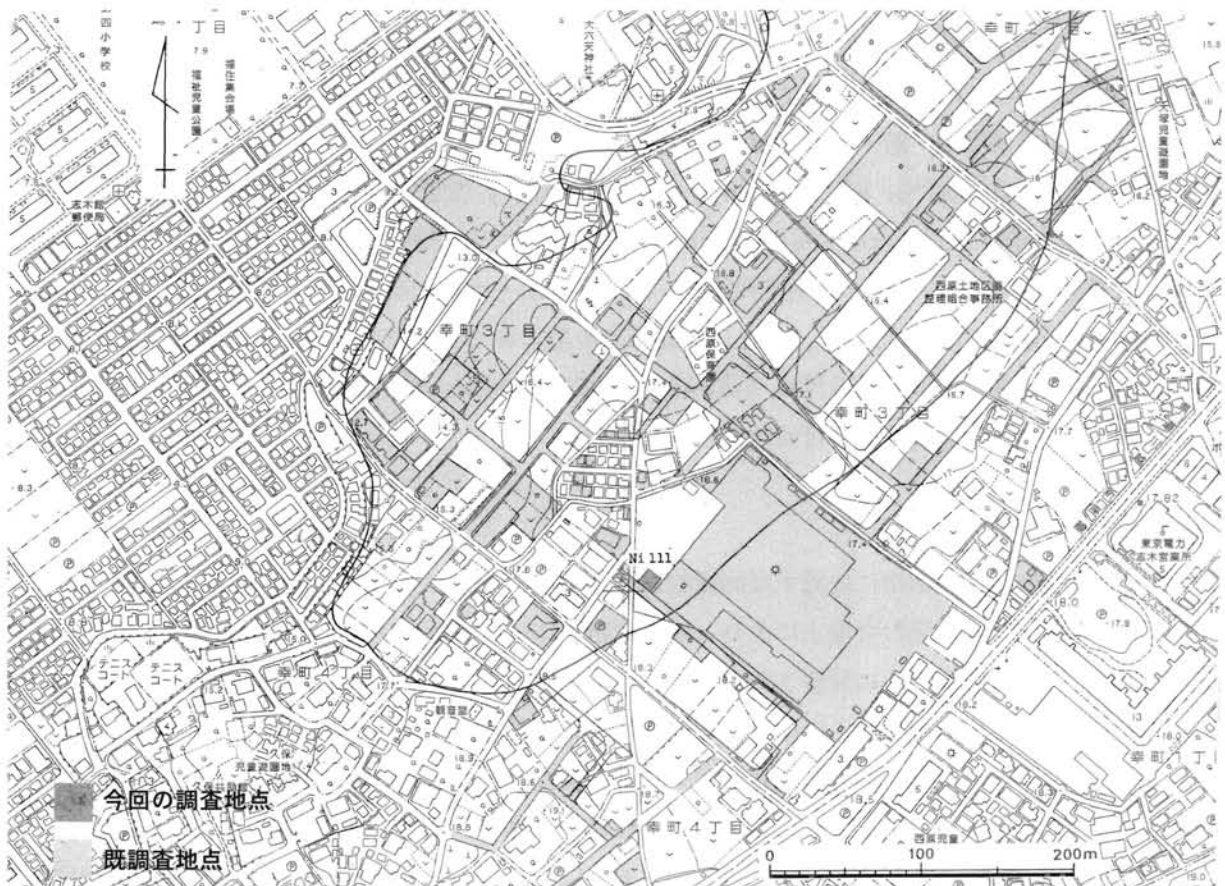
その後、平成16年4月になり消防団車庫建設の計画が本格化した。教育委員会では建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡内にあるため、埋蔵文化財に影響を与える場合には何らかの保存措置が必要である旨を伝えた。

平成16年10月になり、教育委員会では「仮称 生涯学習センター」建設に伴う埋蔵文化財への影響を調べるために試掘調査を行ったが、消防団車庫建設予定地にも住居跡と思われる遺構を確認した。

教育委員会と防災交通課では埋蔵文化財の保存方法について協議したが、建設計画の変更が不可能なことから、車庫建設による工事が埋蔵文化財に影響を与えることが明らかになったため、記録保存としての発掘調査を行うことで合意した。

教育委員会では、防災交通課が発掘調査を行う組織として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋し、遺跡調査会ではこれを受けた。

遺跡調査会では、平成17年1月13日に志木市長と委託契約を締結し、1月17日から発掘調査を開始し



第2図 周辺の地形と調査地点（1/5000）

た。

## (2) 遺跡の位置と環境

### 市域の地形の概要

志木市は埼玉県の南東部に位置し、市の南西は朝霞市・新座市と接し、北東は荒川によってさいたま市と、北西は柳瀬川によって富士見市と画される。市の規模は東西4.73km・南北4.71km・面積9.06km<sup>2</sup>を測る。

市域の地形は、市の中央部を南東流する新河岸川によって大略二分され、北東部は荒川（旧入間川）によって形成された低地、南西部は武蔵野台地の野火止台にあたる。より詳しくみると、市の北西部を流れる柳瀬川は流末で90度近く東方に流れを変へ、新河岸川に合流する。

武蔵野台地は古多摩川の扇状地といわれ、標高100mを測る青梅市付近を扇頂にして西から東に向けて大きく広がる。志木市の台地部分は、武蔵野台地の北東端部にあたり、北東に向けて緩やかに傾斜し、南西奥部の新座市との境付近で標高約19m、先端で9m前後を測る。また、朝霞市との境には南西方向に小さな谷が入り込むため、市域の台地部分は大きな舌状を呈している。

荒川が形成した低地は、市域では上流部で標高約6m、下流部で約5mとあまり比高差はないが、部分的に自然堤防がみられ、僅かな起伏が認められる。

### 市域の遺跡の概要

市域の埋蔵文化財包蔵地は、主に柳瀬川と新河岸川を臨む台地上の縁辺部に集中する。

柳瀬川流域には上流から、西原大塚遺跡<sup>にしはらおつか</sup>、新邸遺跡<sup>あらやしき</sup>（縄文時代前期、古墳時代前期、中・近世<sup>なか</sup>）、中道遺跡<sup>なち</sup>（旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世<sup>しろやま</sup>）、城山遺跡<sup>しろやま</sup>（旧石器時代、縄文時代草創・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世）、中野遺跡<sup>なかの</sup>（旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世）。柳瀬川と新河岸川の合流する付近に市場裏遺跡<sup>いちばうら</sup>（弥生時代後期）。新河岸川流域には田子山遺跡<sup>たごやま</sup>（縄文時代草創・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、近代）、富士前遺跡<sup>ふじまえ</sup>（弥生時代後期、古墳時代前期）。また、朝霞市との境にある谷の奥部には大原遺跡<sup>おおはら</sup>（近世）がある。

荒川低地には現在、宿遺跡<sup>しゆく</sup>（近世）、馬場遺跡<sup>ばんば</sup>（古墳時代前期）、関根兵庫館跡<sup>せきねひょうご</sup>（近世）があるが、自然堤防上には未発見の遺跡がある可能性も残されている。

### 遺跡の立地と環境

西原大塚遺跡は、市の南端に位置する面積約163,000m<sup>2</sup>の市域最大規模の集落跡である。

遺跡は柳瀬川を北西に臨む台地上にあり、標高は14～16mで北西方向に徐々に傾斜しているが、概ね平坦である。台地下の柳瀬川に開析された低地は約8mを測る。崖下には小規模な湧水地が認められるが、2ヵ所は比較的規模が大きくその部分がえぐれているため崖線は凹凸をなす。

遺跡を載せる台地上には畑地を多く残しているが、現在、土地区画整理事業が進行中であり、それに伴い住宅建設の件数が激増していて、埋蔵文化財に対する影響が危惧されている。

本遺跡の最初の発掘調査は昭和48年に行われ、それ以降、教育委員会・志木市史編さん室・遺跡調査会が発掘調査を実施していて、旧石器時代、縄文時代早～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈

良・平安時代、中・近世の集落遺跡であることが知られてきている。

### (3) 発掘調査の経過

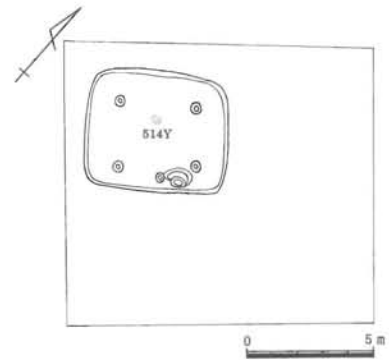
発掘調査は平成17年1月17日から開始した。平成16年10月に実施した試掘調査により、現地表面から遺構確認面まではロームを主体とした盛土約50cm、耕作土30～40cmの層厚があり、また、填圧され非常に硬かったことが判明していたため、バックホーを使用して表土の掘削を行った。

18日には住居跡の範囲を確認し、十文字に土層観察ベルトを設定し調査を開始する。

19日には床面まではぼ掘り進み、土層図を作成する。覆土中には遺物が非常に少ない。

20日には炉跡・柱穴・貯蔵穴を掘りあげ、遺物出土状態の写真撮影・平面図・断面図等の記録を作成する。

21日には完掘状態の写真撮影、各図面の補足作業を行い実質的な調査を終了した。なお、埋め戻しは29日に行った。



第3図 遺構分布図 (1/300)

## II 検出された遺構と遺物

### 514号住居跡 (第4図)

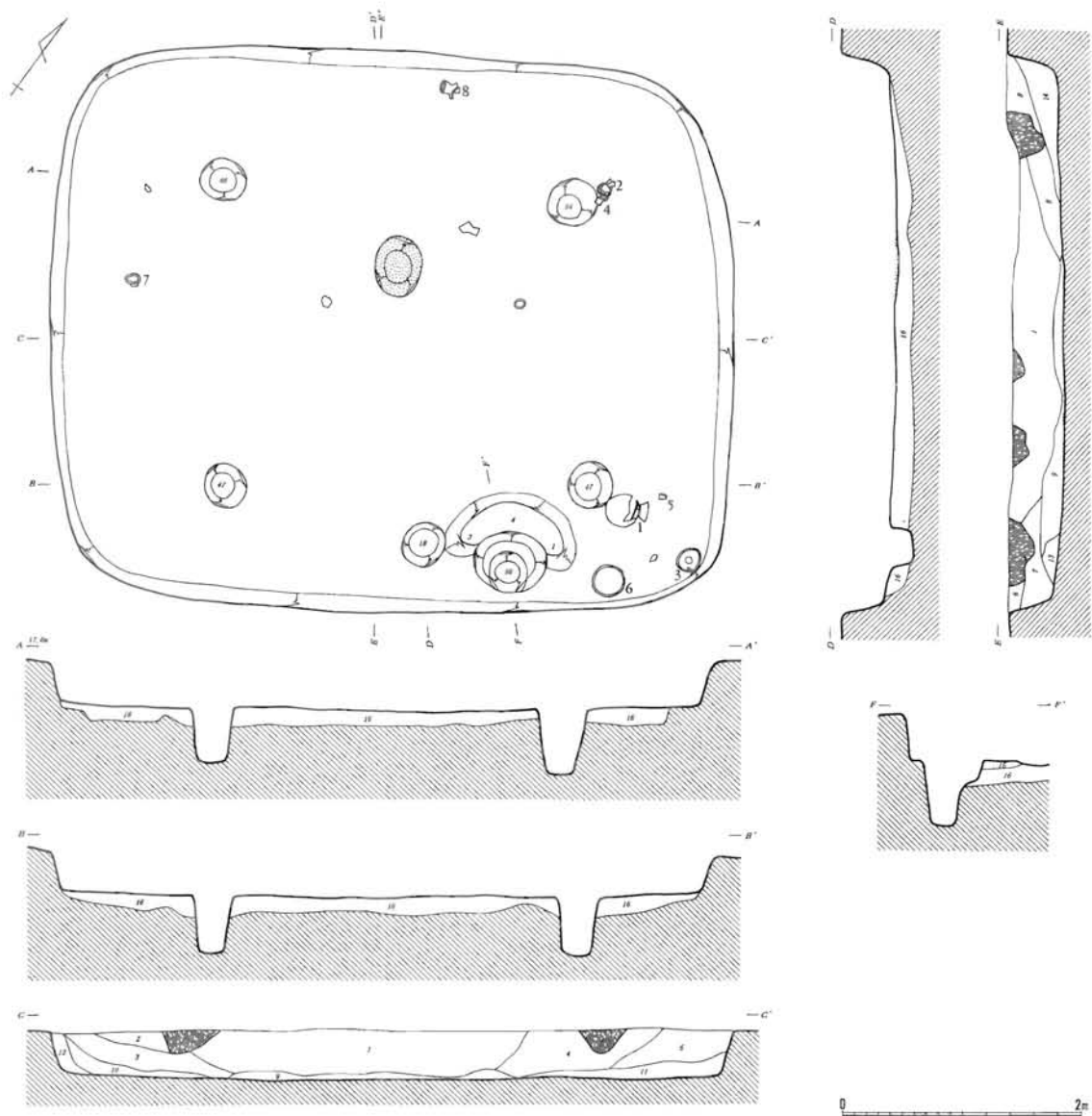
〔構造〕 短軸が主軸。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 470×570cm。(主軸方位) N-35° -W。(壁高) 28～42cmを測り、70° 前後の角度で立ち上がる。(床面) 全面軟弱で、硬化部分は認められなかった。住居掘り方に土を充填しているだけで床面を構築。(炉跡) 住居中央から北に偏って位置する。50×40cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmを測る。炉床は被熱の時間が短かったせい、あまり赤化していず軟弱である。(柱穴) 各コーナーに主柱穴4本を検出した。南壁際中央のピットは入口施設に関係しようか。(貯蔵穴) 南壁際中央から東に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈し、深さ56cmを測る。貯蔵穴北側には幅2.5～3.5cm、高さ2～4cmの凸堤が弓状に構築される。

〔覆土〕

- 1層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 5層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 7層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 9層 褐色土(10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質で粘性あり。

- 10層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 11層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質で粘性あり。
- 12層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。壁の崩落土。
- 13層 黒褐色土(10RY3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 14層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 15層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロック。硬質。凸堤を構築。
- 16層 暗褐色～にぶい黄褐色土(10YR3/3～10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床  
充填土。

堆積状態が不整合に近く、覆土中にロームを多く含むなど埋め戻された感が強い。ただし、1層とした黒色土は自然堆積層と思われる、本遺跡ではこの時期の住居跡の最上層に堆積している事例がある程度認められる。複数の住居跡の廃絶時期の同時性を決定するために有効な土層になる可能性がある。  
〔遺物〕 多くは貯蔵穴横、東コーナー部の床面上から出土。



第4図 514号住居跡 (1/60)

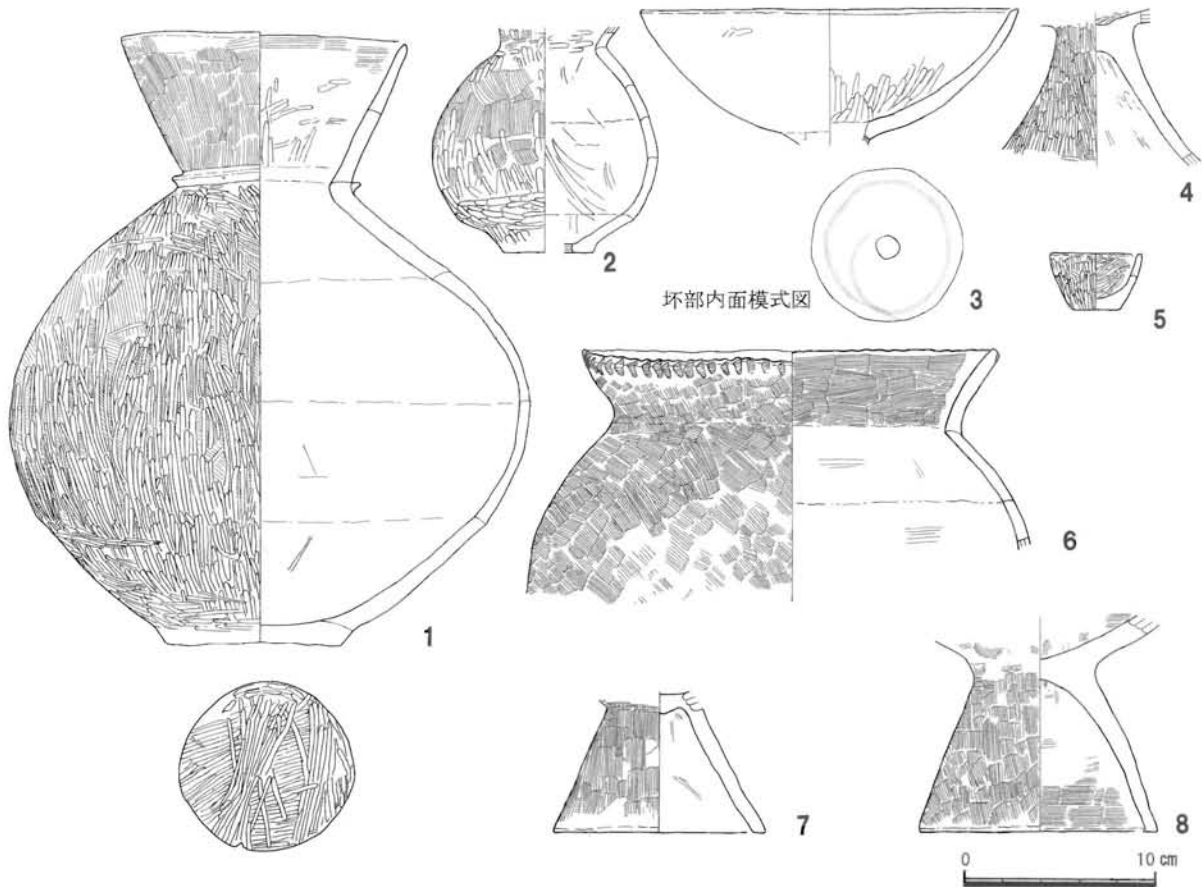
〔時期〕 古墳時代前期前半。

514号住居跡出土遺物（第5・6図）

壺形土器（1・2、9～11）

1は完形で、貯蔵穴横の東コーナー付近床面上から横に倒れたような状態で出土した。口径14.7cm、底径9.2cm、器高32.5cmを測る。平底の底部から大きく開きながら立ち上がり、最大径を体部中位にもつ張りの強い球状を呈する器形である。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に外反する。頸部外面には断面三角形の凸帯が一周する。口唇部内外面はヨコナデされる。口縁部外面はヘラナデされるが縦位のハケ目痕が残る。口縁部内面も同様であるが、ハケ目痕が上部に僅かに残り、下位には僅かにヘラミガキ痕がみられる。体部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされるが、一部にハケ目痕がみられる。体部内面は工具痕や輪積痕がみられない位非常に丁寧にヘラナデされる。底部には、木葉痕を消すようにヘラミガキが施される。体部外面と口縁部内面には、焼成時のものと思われる黒斑が底部から体部下半にかけて2ヶ所、肩部に2ヶ所と、口縁部内面中位に細長く一周するようにみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）、黒斑部は黒色（7.5YR2/1）を呈する。胎土には礫、粗砂、白色粒子、赤褐色粒子を少量含むがきめ細かく堅緻なつくりである。全体に非常に丁寧に作られている。

当該土器は成形方法に特徴があり、底部から頸部までを3分割して作られた様子が観察される。まず底部から体部下半までを製作し、ある程度乾燥して安定してから、その上に厚さ5mm以下という器壁の薄い球形の体部を作り上げる。体部下半にみられる僅かな稜は、粘土積み上げ時の不連続性をあらわしているものと思われる。その後再度の乾燥時間を経て厚めに作られた肩部と口縁部を積み上げて作られ



第5図 514号住居跡出土遺物1（1／4）

たと推測される。胎土には含有物が非常に少なく、色調もかなり明るく、当遺跡の在地の土器群とは大きく異なる特徴を示す。類例としては、西原大塚遺跡第45地点の216号住居跡で出土した1の壺がある。しかし成形方法も胎土の特徴も514号と216号の土器では大きく異なるため、514号の土器は他地域よりの搬入の可能性も考えられよう。514号の1は216号の土器よりも体部の球状化、頸部の屈曲がより強いなど新しい要素を持つため、やや新しい時期のものと思われる。時期は比田井氏編年の古墳時代前期I段階新相に位置づけられよう。

2は口縁部を欠損する小形の土器。床上35cmの覆土中からの出土である。底径4.7cm、現器高12cmを測る。平底の底部から立ち上がり、やや下膨れの球形を呈する。底部はヘラナデされる。体部外面はヘラミガキされるがハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが工具痕が残る。口頸部内面は横方向にヘラミガキされる。しかし全体的に斑点状の剥離が顕著で、明瞭ではない。色調は外面はにぶい赤褐色(5YR5/3)、内面はにぶい橙色(5YR7/3)を呈する。胎土には細礫、粗砂、白色粒子を含む。1の壺よりも体部がやや下膨れという古様を示す特徴を持つ。

9・10は口縁部破片。いずれも覆土中より出土した。9は折り返し口縁の土器。口唇端部にはRLの単節縄文が施され、2本の短い棒状浮文が貼り付けられている。内面にはRLの単節縄文が羽状に施され、羽状縄文1段目と2段目の境に、3個の円形浮文が施される。外面口縁部はヨコナデ、以下縦方向にヘラミガキされ、赤彩される。内面縄文帯以外は横方向にヘラミガキが施され、赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、赤彩部はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には礫、粗砂、白色粒子、雲母を含む。10は複合口縁の土器。口唇端部にはLRの単節縄文が施され、内面にはLRの単節縄文が施され、下端にS字状結節文が施されている。口縁部外面には左方向から指で押さえたような跡がみられる。口縁部下端には極めて浅い刻みが施される。内外面ともに赤彩痕が見られるが、器面の荒れが激しく不明瞭である。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈し、赤彩部は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。胎土は細礫、粗砂、白色粒子を含む。いずれも文様と調整の特徴から弥生時代末葉～古墳時代初頭の時期の遺物であると考えられるため、当住居跡に伴うものではないであろう。

11は頸部から肩部にかけての破片で、覆土中からの出土。外面には6条一単位の櫛歯状工具による、波状文と横線文が施される。施文順はまず1・3・5段目に横線文を施し、その後2・4段目に振幅の小さい波状文、6段目には2・4段目より振幅の大きい波状文が施される。内面は横方向にヘラナデされるが工具痕が残る。頸部付近には指頭痕がみられる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には礫、粗砂、軽石と思われる白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。当該土器は東海地方に系譜を持つ土器である。類例としては、西原大塚遺跡第45地点の187号住居跡の1がある。当地域へも東海系土器が浸透してきた事がこれらの土器からも明らかである。時期は東海系土器が関東地方に多く搬入したと言われている廻間I式4段階から廻間II式1段階の間、すなわち古墳時代前期I段階古相と考えられる。

#### 高坏形土器(3・4)

3は坏部のみ残存する。東コーナー壁際より出土。口径20cm、現器高7.2cmを測る。口縁部が外傾気味に広がる碗状の器形である。口縁端面に面を持つ。口縁部内外面ヨコナデ、以下ヘラナデされるが、内面下位にはヘラミガキ痕が残る。坏部外面下位から口縁部にかけて片面全体に黒斑がみられる。内面口縁部にも10cm程の棒状の黒斑がみられる。そして原因は不明であるが、この土器の内面には製作途中の粘土がまだやわらかいうちに付いたと思われる2条の円形状の圧痕が明瞭に残っているのが観察され

る。調整時の工具痕ではなく、塊状の器（例えば坏）などを重ねた痕のように見える。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には礫、粗砂、1~5mmの白色粒子を含む。類例としては西原大塚遺跡第45地点183号住居跡の高坏がある。3の土器は183号住居跡の土器よりも深さが減少し、より外傾したような形状であるなど、新相を示す要素が見られることから、183号の高坏より時期は下ると考えられる。従って1の壺と同時期、古墳時代前期I段階新相であることが推測される。

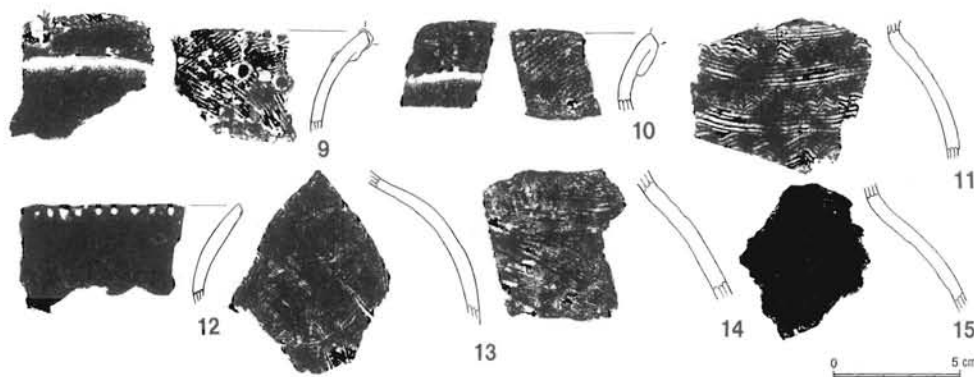
4は脚部のみ残存。脚裾部は欠損する。住居跡北寄り柱穴付近の床面上から出土した。現器高8.4cmを測る。坏部は凹面から一度平らに広がる器形のようなものである。脚部は整った円錐形を呈するが、脚部中位付近から緩やかに開きを増す様子が観察される為、脚裾部へかけて末広がり広がる器形と推測される。坏部内面は横方向にヘラミガキされるが、斑点状の剥離が激しく不明瞭である。脚部外面は縦方向に細いヘラミガキが施される。内面は横方向にヘラナデされるが、上位に工具痕、中位に絞り目が残る。脚部外面残存部の大部分と坏部内面には黒斑がみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、黒斑部は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には粗砂、白色細粒子を含むが、精製されており大変きめ細かく堅緻である。

#### 鉢形土器（5）

5はミニチュアの土器。1/2程度残存する。住居跡北コーナー付近の覆土中から出土。推定口径は4.8cm、推定底径は2.5cmを測る。器高は3cmである。平底の底部から直線気味に立ち上がり、口縁部は短く内湾する。口縁端面は丸く成型される。内外面共に丁寧で細かいヘラミガキが施される。底部は粗くヘラミガキされる。外面底部から口縁部にかけてと、内面下位には黒斑がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）、黒斑部は褐灰色（5YR4/1）を呈する。胎土には細砂、白色細粒子が僅かに確認されるのみで非常に精製されきめ細かく堅緻である。

#### 甕形土器（6~8・12~15）

6は台付甕形土器の甕部。中位以下を欠損する。貯蔵穴北側壁付近床面上から口縁部を下にして、伏せたような状態で出土した。口径22cm、現器高13cmを測る。球状を呈すると推測される体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面にはハケ状工具により、正面から見てやや左方向から刺突された刻みが巡る。内外面ヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。頸部内面から内面体部上半にかけて指頭痕が一周する。外面には全体的に煤が付着する。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）、黒斑部は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には礫、粗砂、白色粒子を含む。時期は頸部の「く」字状化と体部の球状化の進行が明確化しているという特徴からやはり1・3の土器と同じ古



第6図 514号住居跡出土遺物2（1/3）

墳時代前期 I 段階新相であると考えられる。

7・8 は台付甕形土器の脚台部。7 は住居跡南西寄りの床面上から出土した。甕部との接合部から裾部へかけて直線的に広がる器形である。脚部内面の天井には凸部が見られる。これはまず鉢状に成形した脚部を逆さにしてから穿孔し、突起のついた粘土板を挿入して甕部を接合した様子が良く観察できる例である。甕部内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。脚台部内外面はヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるが上位に工具痕、下位にハケ目痕が残る。色調は外面が赤褐色 (5YR4/6)、内面がにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には礫、粗砂、白色細粒子を含む。8 は北西の壁際床面上より出土。脚部は僅かに内湾しながら裾部へかけて広がる器形である。裾端部には粘土のはみ出しが見られる。甕部内面はヘラナデされる。脚部内外面はヘラナデされるが、外面と内面下位にハケ目痕が残る。内面上位から中位にかけては工具痕が残る。甕部内面には炭化物の付着が見られる。色調は外面はにぶい橙色 (5YR6/4)、内面はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には礫、粗砂、白色粒子を含む。

12 は口頸部破片で、覆土中より出土。口唇部には浅く刺突された刻みが巡る。内外面ともにヘラナデされるが、外面頸部付近にハケ目痕が残る。全体に器面の磨耗が激しい。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/6) を呈する。胎土には礫、粗砂、白色粒子を含む。

13～15 は頸部下端から肩部の破片で覆土中からの出土。13 は内外面ヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。内面肩部上位にも僅かにハケ目痕が見られる。外面には煤が付着する。色調は外面肩部赤褐色 (5YR4/6)、煤部は黒褐色 (5YR3/1)、内面はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。胎土には礫、粗砂、白色細粒子を含む。14 は内外面ヘラナデされるが頸部外面には縦位、以下横位と斜位のハケ目痕が残る。色調は外面はにぶい褐色 (7.5YR6/3)、内面は橙色 (7.5YR7/6) を呈する。胎土には礫、粗砂、雲母を僅かに含む。15 は内外面ヘラナデされるが、外面には縦位のハケ目痕が残り、内面には輪積痕が明瞭に残る。色調は橙色 (7.5YR7/6) を呈する。胎土には礫、粗砂、白色粒子を含む。

以上、今回514号住居跡から出土した遺物の中から遺存度が高く、出土位置も明確な1・3・6の遺物を中心にこの住居跡の時期を検討した結果、古墳時代前期 I 段階新相であると推測される。

### Ⅲ 概 括

西原大塚遺跡の弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての遺構は、これまでの調査で500軒を越す住居跡と27基の方形周溝墓があり、該期の集落跡としては当地域では群を抜く存在である。

今回調査された住居跡は「炉・4本の支柱穴・凸堤を持つ貯蔵穴・入口施設と思われるピット」を備えたこの時期の典型的なものであるが、住居の短軸を主軸にするという点で特異であり、本遺跡でも数は多くない。一般的なものと90°主軸を異にするこのような住居に関しては、上屋構造に変化があるのか、使用について特定の意味をもつものなのか、興味のあるところである。

住居跡の時期については、出土した壺・高坏・甕形土器から古墳時代前期 I 段階新相に位置づけることができた。本遺跡においてはこの段階の住居跡数が多くその重複も認められる。このことと土器編年の細分とを合わせて、住居跡群の変遷を捉えていくことが今後の課題と考えられる。



〔引用・参考文献〕

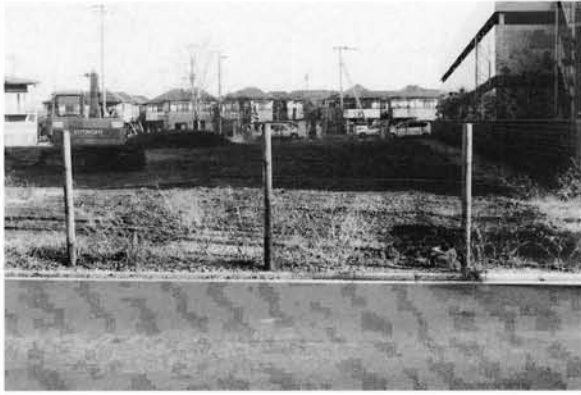
- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県文化財センター
- 小倉 均 1990「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構について」『埼玉考古第27号』
- 尾形則敏 1990「第4章 西原大塚遺跡第9地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集  
1999「第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集  
2000「第2章 西原大塚遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群10』志木市の文化財第28集  
2003「第3章 西原大塚遺跡第54地点の調査」『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2004「第3章 西原大塚遺跡第65地点の調査」『志木市遺跡群14』志木市の文化財第36集
- 加藤修二 1997「結節文についての一考察」『奈和』第35号
- 古墳時代土器研究会編著 1997『土器が語る—関東古墳時代の黎明—』第一法規出版
- 佐々木保俊 1985「第1章 西原大塚遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点 発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集  
1989「第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集  
1991「第2章 西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第16集  
1996「第4章 西原大塚遺跡第14地点の調査」「第11章 西原大塚遺跡第21地点の調査」志木市の文化財第24集  
1997「第8章 西原大塚遺跡第34地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集  
2002「第3章 西原大塚遺跡第47地点の調査」『志木市遺跡群12』志木市の文化財第32集
- 佐々木保俊・尾形則敏 1987「第2章 西原大塚遺跡第4地点の調査」『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査』志木市遺跡調査会調査報告第3集  
1990「第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査」「第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳「第3章 西原大塚遺跡第43地点の調査」『志木市遺跡群』志木市の文化財第30集
- 佐々木保俊・関根正明・上田 寛・内野美津江・宮川幸佳 2000『西原大塚遺跡第45地点の発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第6集
- 谷井 彪 1975『西原・大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集
- 宮川幸佳 2003「西原大塚遺跡における方形周溝墓出土土器」『埼玉考古』第38号  
2004「志木市西原大塚遺跡出土の古墳時代前期後半の土器」『埼玉考古』第39号

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはらおおつかいせき だい111ちてん はくつちようさほうこくしょ							
書名	西原大塚遺跡第111地点発掘調査報告書							
副書名		巻次						
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	巻次		第 8 集				
編著者	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳							
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成17年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはらおおつか 西原大塚 遺跡第111地 点	しきしさいわいちよう 志木市幸町 3丁目64街区10画地	11228	007	35° 49' 11"	139° 34' 7"	20050117 ～ 20050121	138.5m <sup>2</sup>	消防車庫建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
にしはらおおつか 西原大塚 遺跡第111地 点	集落跡	古墳時代前期	住居跡	1軒	壺形土器・甕形土器 高坏形土器・鉢形土器			

# 圖 版





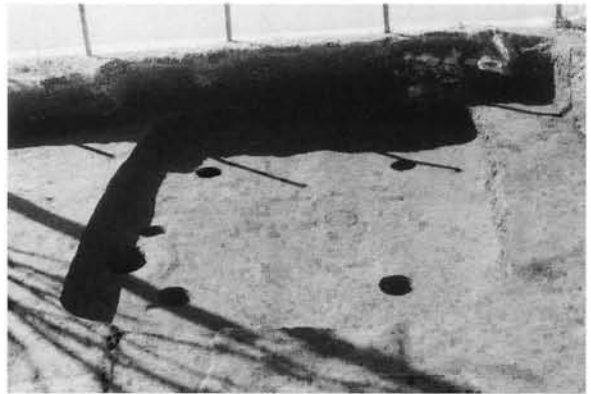
調査区近景



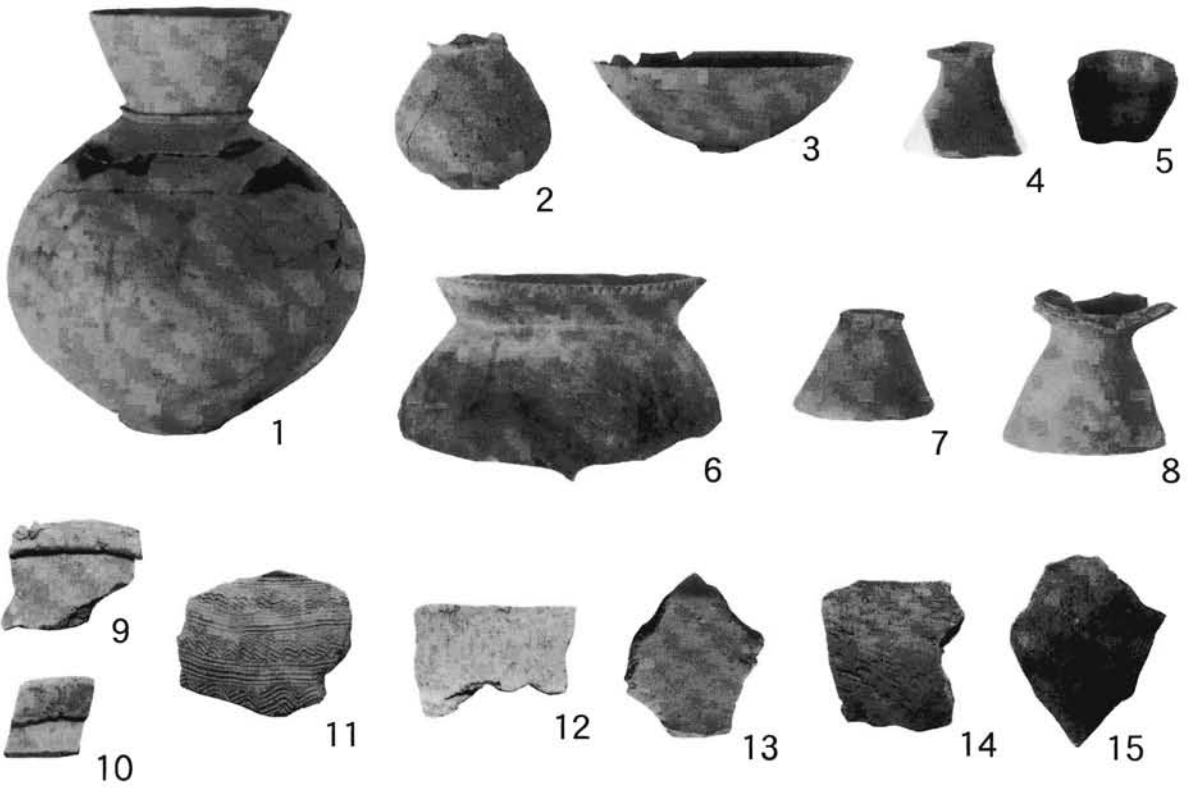
発掘調査風景



遺物出土状態



514号住居跡



出土遺物

志木市遺跡調査会調査報告 第8集

## 西原大塚遺跡第111地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市遺跡調査会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発行日 平成17年3月31日  
印刷 株式会社白峰社